

七 不 思 議

第六 飾りなき告白

(一日は園主任會議、一日は以下の保姆の集會、この二つの會の形式上の協議が行はれた。誠に奇麗で、眞面目らしく、熱心の様子は實に吾人を力強く感せしめた。併しそは束の間で何れの會も茶話會となり、ストーブ會議となつた。衝立の後で聞取つて見ると、意外又意外。一括して記して見れば次の如くであつた。)

○どうです、△さん、此頃は講習で食傷しさうでしたね、

△ほんとうね、もつともね、□さんの様にお舟を漕いで居れば却てお家へ歸つて御用をなさるより休息が出来てよござんすけれど

○いくら講習を受けたつて、こつちの頭が古いの

み な と
だからだめよ、時に此間先生のお話しのあつた本は御覽になつて、

□まだ見ません、皆さんは……おや／＼こんなに多勢の方が一人も御覽にならないの、まあよかつた、私一人かと思つて心配して居つたのよ、

△大丈夫よ、あれはお話として聞いて置けばいいのだわ、あの時もう一つ、ほら何んでしたつつけね、幼児の個性を見るのに一番雜作なくて手數もかゝらないよい方法があるつて教へて下さいましたらう、

△さう／＼すっかり忘れて居たわ、何んでもそれを伺つた時は、私もやつて見やうと思つたけれど毎日他のことに追はれて居るのですもの、

○ △さんはあの方でお忙しいのでせう、

× あの方つてなあに、

○あなた御存じないの、どうして〜、△さんはこの方では、それは〜お熱心よ（何か手まねがあつた様だ）

×あゝそれですか、併しよく云へば修養、わるく云へば道楽ね、

△まあそんなものね、併し此の二十人の主任の方と六十人の保母さんの内で無藝なのはあなた一人位ですよ、みんな何かやつて居ますよ、

□年を取つてさ、あくせく〜して、鳩ぼつばや「さあお舟を作りませう」計りに熱中しても居られやしませんわ、ねえ皆さん」

（二期せずして一致の聲）

× ○さん、あなたの方の保母さんが云つて居ましたよ、私の方の主任は、毎朝おけいこで遅刻計りするつて、そして私達が少し遅れると御機嫌が悪いつて、

○ もう私も随分長く御奉公をして居るのですも

の、其位な事があつても、いゝぢやありませんか、いけなければやめるだけだわ、

（片方に黙して居た二人の主任が）あの方はもう先から

やめる〜と云つて中々やめる所か、口計りね、先達も、○○さんがあの方が居ては、あの園の進歩は望まれないからと云つて、やめさせやうとなすつたところが○さんには、あの土地の有力者が二三人後援者になつて居るので、○○さんは却て逆ねぢ、

△おや〜あの方でも後援する方があるの、

× ○さんは園はあんなでせう、けれど有力者の訪問と來たら、それは〜凄腕よ。とても私共が十人寄つたつてあのまねは出来ませんよ、あゝ云ふ根のはえた方は主任にも保母さん方にも随分多いのですつてね、

△え、それが多いので改革が出来ないのですつて、小供が可愛想ね。

(この時、晚鐘九時を報ず、一同慌て、解散。)

第七 七つの疑問

(一)、フレーベルの額。

何處にも遊戯室、保育室又は保母室にフレーベルの肖像が必ず掲げてある。其意味は？

保母さんの氣合を見ても、幼兒の遊戯や手技や唱歌を見ても、フレーベルの幼兒に對する考とは丸で掛け離れて居る。寧ろ反對な保育、否仕方が見受けられる。これでは毎日フレーベルを泣かせて居る。

(二)、何處の國の教育か。

前に云つたフレーベルの額に對して何か掲げられて居るかを見ると、數多き日本の忠臣義士や教育家の肖像は一つも見えぬ。恩物も舶來も、手技も日本のものは少ない、しかも舶來も肝腎な心髓はうろぬき、

これで國民性がどうの、軍國主義がどうのと心配して居る。嗚呼何とか工夫はないか、日本的

のものは出來ないのか。

(三)、責任を知れるもの。

幼兒時代の教育が最も大切であることは云ふまでもない事である、そこで其意味を了解して保育する保母、言ひ換へて見れば自己の責任を重んじて盡して居る保母はそも幾人？

(四)、責任と待遇。

世の中は責任の重いものは従つて精神的にも物質的にも報酬が多いものでなければならぬ、然るに保母の責任は實に〳〵重いのに對して、實に貧弱、世間の之れを冷遇することの甚しい事は言語に絶して居るではないか。

(五)、國家百年の計。

我國の政府——教育は上へ行く程大切にして下になる程、冷遇する、其國を双肩に荷ふべき國民——其國民の力を養ふべき其國家の基礎となるべき幼兒教育に對して當局者がもつと〳〵重きを措かねば、國家百年の大計を確立したる國

是とは云へまい。少くとも何れの階級の教育も同じく重く考へて貰ひたい、然るに俗吏の多い現在は實に反對……

(六)、所謂教育家。

一般に教育家は幼児教育を重く見て居るか如何。大教育家も小教育家も其眞意を知らないで、妄評を試みる者が多い。おかしいではないか。

幼児教育も教育の内ではないか。

基礎ではないか。出發點ではあるまいか。

(七)、不思議。

これは諷刺といふよりは、寧ろある方面に向つて、直接に刺戟劑を投じたのであつた。然るに患者の多い方面にはあまり反應がなくて、やゝ健康に近い方面に刺戟がよく利いたどこまでも不思議ではないか。(完)

種蒔く百姓と馬

ある日、一人の百姓が燕麥の種を蒔いてゐた。若い一匹の馬は之を見て、自分一人で理窟をつけてぶつ／＼言つてゐた。

「なんだ、燕麥をたゞ此所へ蒔いたつて仕様がないうちやないか。人間は馬よりも伶俐だといふ評判だが、こんな風に何の目的もなく燕麥を蒔散らすなんて、これ程間の抜けた馬鹿々々しいことばあるまい。あの麥を俺に呉れるか、それともこゝの秣置場に貯へておくとか、鶏にやるとかするなら、譯が分つてゐるが、何しる斯う一面に蒔散らして了ふのは、全く馬鹿の骨頂だ」

さて時經て秋になると、嘗て蒔いた燕麥は實つて穀物倉に貯へられた、そして百姓はその麥でこの若い馬を飼つた。

世の中にこの馬の意見に賛成する程の人もあるまい。併し昔から今に至るまで、造化の深意をよく解せず、之に愚蒙な批評を加へる者はある。(グルイロフ)